2007 年 6 月 29 日発行

FOREX WEEKLY

三井住友銀行
SMBC SUMITOMO MITSUI BANKING CORPORATION

市場営業統括部　ﾁｰﾌ･ｴｺﾉﾐｽﾄ　山下えつ子
電話　03-3282-5879

来週のポイント

ドル／円：　レンジ

	週末 正午	次週発行まで	３ヵ月後
ドル/円	*123.32 円*	*122.00-124.00 円*	*118.00-125.00 円*

- 米国は雇用統計等、主要経済指標の発表があるが、サプライズなし。
- 日本は日銀短観が注目材料だが、円買いにはならない。

ユーロ／円：　レンジ

	週末 正午	次週発行まで	３ヵ月後
ユーロ/円	*165.65 円*	*164.00-167.00 円*	*158.00-170.00 円*
ユーロ/ドル	*1.3433ﾄﾞﾙ*	*1.3400-1.3500ﾄﾞﾙ*	*1.3200-1.3800ﾄﾞﾙ*

- ＥＣＢ理事会では利上げ継続は示唆されるが、市場は織り込み済み。

本レポートは本日正午までの情報を元に作成しています。

FOREX WEEKLY は弊行ホームページでもご覧頂けます。
(http://www.smbc.co.jp/　マーケット情報→外国為替情報→フォレックス･ウィークリー)

本資料は情報の提供を目的としており、何らかの行動を喚起するものではありません。投資や資金運用に関する最終決定は、お客様ご自身で判断されるようお願い申し上げます。

足元のマーケット動向、及び来週の見通し

		今週のレンジ	来週の予想レンジ
ドル	ドル／円	122.23-124.14 円	122.00-124.00 円
ユーロ	ユーロ／ドル	1.3389-1.3483ﾄﾞﾙ	1.3400-1.3500ﾄﾞﾙ
	ユーロ／円	164.24-166.94円	164.00-167.00円

（今週のレンジは先週金曜日正午～本日正午、予想レンジは本日正午～来週金曜日正午）

＜今週の動向＞

先週の円安の後、今週はBISレポートや尾身財務相の発言などを受け、前半は円買戻し基調。ドル円は27日に122円台前半まで下落したが、株価の持ち直しとともに再び円安基調となり、123円台半ばにて越週。ユーロ円は週初の166.94円から、27日には164.24円まで円買戻しとなった後、166円近辺まで戻した。

＜来週の見通し＞

米国のサブプライム問題の再燃などから株価が下落し、米ダウは 6/15 の直近高値 13688 ドルから 6/27 には 13259 ドルまで下落、日経平均株価も 27 日には前日終値比 216 円安で引け。こうした中、「リスクリダクション→円高」との発想もあったが、米国の株価反発をきっかけに再び円安の流れとなっている。22 日にドル円は 2002 年以来となる 124 円台に乗せ、その後 BIS 年報で円の下落が異常であるとの指摘があったことや、尾身財務相が「為替相場はファンダメンタルズを反映すべき」「注意深く見守っていきたい」と発言したことも円安に対する市場の警戒心を高めたが、株価の戻りで相場的には払拭された格好。円安は日本の低金利と内外金利差が主因。日銀のゆっくりした利上げペースを想定すると、トレンドはまだ変化しえない。円高は当面その中で内外の金融政策に対する思惑の変化で局所的に現れるのみだろう。

米金利爆騰の局面を過ぎたため、ドル円は目先、際限なく上昇するといった勢いを欠くと思われるが、28 日の FOMC 声明文でもインフレ警戒スタンスが維持されており、米金利は低下しにくく為替相場もドル売りにはなりにくい。来週は 2 日に製造業 ISM、5 日に非製造業 ISM、6 日に雇用統計、と主要経済指標を迎えるが、強弱いずれにも大きく傾かないと予想。結果として、経済指標を受けた米金利の上下がドルを高下させる程度は小さめ、と見ている。

日本では 2 日に日銀短観が公表される。為替相場や原油相場など外部環境に大きな変化がなかったことから、企業の業況判断 DI は現状も先行きも横ばい圏が予想されるが、設備投資計画が上方修正されることで茲許の機械受注や生産など弱めの数字に基づく慎重論が後退することになろう。ただし日銀の追加利上げの時期の予想が短観を受けて 7 月にまで早まることはなく、円高は限定的。

他方、ユーロ圏では ECB 理事会が 5 日に開催される。6 月の ECB 理事会では「金利水準は中立的な水準まで上がってきたが、利上げは終了していない」がメッセージだった。追加利上げは市場に織り込まれており、今回は ECB のメッセージは前回と大きな変化なく、市場も反応薄が予想される。

ドル、円、ユーロいずれも来週は今後の金融政策に関わる重要な指標やイベントがあるものの、いずれについても早期の政策変更を示唆する結果にはならず、市場の金利観は不動、為替相場は小幅レンジ、が予想される来週の姿である。